双葉通信【第 141 回】“ふくしまの切捨ては許さない”　　20220201

上　田　　勉

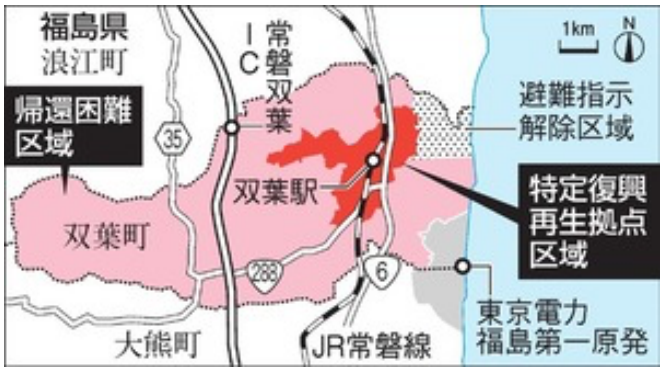
全町避難の福島県双葉町で準備宿泊始まる　「やっとこの日が」喜ぶ住民

東京電力福島第一原発事故後、11 年近く住民が一人も帰還できていない福島県双葉町で 1 月 20 日、準備宿泊が始まった。原発事故で住民が避難して以降、同町に寝泊まりできるのは今回が初めて。帰還を待ちかねた住民らは朝早くから自宅へ戻り、生活再建に向けた準備を進めた。

同県南相馬市に避難中の谷津田陽一さん（70）は同日朝、妻と愛犬とともに自宅に戻り、電子レンジや冷蔵庫を運び入れた。「やっとこの日が来た。少しでも前に近い生活を取り戻したい」と話す一方で、「原発事故で帰れなかった。東電への怒りもある」と複雑な心境も明かした。谷津田さんは原発事故後、県内外を転々としながらふるさとに帰る日を待ちわびたが、自宅周辺は様変わりし、準備宿泊の申請も 11 世帯 15 人にとどまる。「さみしい。若い人が戻りたくなる対策を考えてほしい」

準備宿泊は、帰還困難区域がある原発周辺 7 市町村のうち、区域に住民登録のない南相馬市を除く 6 町村の「特定復興再生拠点（復興拠点）」で順次始まりつつある。双葉町の伊沢史朗町長は「戻った人が戻って良かったと思える環境をつくることで、どんどん居住者を増やせると確信している」と話した。（福地慶太郎、長屋護）

（「朝日新聞」2022 年 1 月 21 日付け）



双葉町には震災当時、7,140 人が住んでいた。原発事故による全町避難が今も続き、町民は 42 都道府県で避難生活を送っている。

町は、帰還困難区域のうち「特定復興再生拠点（復興拠点）」について、6 月の避難指示解除をめざしている。これに先立ち、帰還する町民が生活の準備をするため自宅に泊まれる「準備宿泊」が 1 月 20 日から始まった。一方で避難先での生活再建が進み、27 日までの準備宿泊の申請は 13 世帯 19 人、未成年は大沼さんの息子 2 人だけだ。

町は避難指示解除から 5 年後に、移住者も含めて居住人口 2 千人を目標に掲げる。だが、復興庁や町が昨年行った意向調査では「戻らないと決めている」が 6 割に上り、帰還を希望する人は 1 割だった。（「朝日新聞デジタル」2022 年 1 月 31 日 5 時 00 分）

【双葉町】現在の居住人口は 0 人・新型コロナ感染者も 0 人（全国で唯一の自治体）

【撤去される前の駅前商店街の看板（双葉町）（「朝日新聞デジタル」）】

【2022 年の駅前商店街（双葉町）】